2025 7.1(火)▸7.29(火)
19:00-20:30

Co-funded by the European Union

KYUSHU UNIVERSITY EU CENTRE

九州大学EUセンター（ジャン・モネCoE九州）市民講座2025

ヨーロッパ―その豊かさと現実

Europe — Its Fecundity and Reality

第1回 7月1日（火）

『米中ロ対立の中のヨーロッパ～冷戦後の欧米・欧中・欧ロ関係とそのゆくえ～』

山本 健（西南学院大学法学部 教授）

一橋大学法学部卒業。ロンドン大学ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス（LSE）国際関係史学部博士課程修了。Ph.D.（国際関係史）。現在、西南学院大学法学部教授。専門はヨーロッパ統合史、ヨーロッパ冷戦史。

ヨーロッパは今、グローバルな国際関係の中でどのような位置に置かれているのでしょうか。今回の講演では、冷戦後におけるヨーロッパとアメリカ、ロシア、そして中国との関係の変遷を概観することで、ヨーロッパが現在置かれている厳しい状況を確認します。

第2回 7月8日（火）

『ベートーヴェン「第九」の時代と精神』

西田 紘子（九州大学大学院芸術工学研究院 准教授）

2009年、東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。博士(音楽学)。著書『ハインリヒ・シェンカーの音楽思想』(九州大学出版会)、編著『ハーモニー探究の歴史』『近代日本と西洋音楽理論』(音楽之友社)、『音楽と心の科学史』、共訳書 ボンズ『ベートーヴェン症候群』(春秋社)など。

ベートーヴェンの第九交響曲の創作プロセスや音楽的特徴、シラーの詩の背景について、実際に音楽を聴きながら解説し、第九が19世紀の社会でどのように聴かれたのかについて、さまざまな史料をもとに紹介します。また、現代社会においてベートーヴェンの第九はどのような機能を果たしているのでしょうか。現代の映画や演奏を例に今日の受容のありさまを知ることで、第九の「当時と今」を横断します。

第3回 7月22日（火）

『「昭和100年」と「トーマス・マン生誕150年」』

小黒 康正（九州大学大学院人文科学研究院 教授）

博士（文学）。日本学術会議連携会員、日本独文学会前会長。著書に『黙示録を夢みるとき　トーマス・マンとアレゴリー』（鳥影社、2001年）、『水の女　トポスへの船路』（九州大学出版会、2012年；新装版2021年）、『「第三帝国」以前の「第三の国」　ドイツと日本におけるネオ・ヨアキム主義』（九州大学出版会、2025年）、訳書にトーマス・マン『トーニオ・クレーガー』（岩波文庫、2025年）など。2024年5月にNHK「100分de名著　『魔の山』」に出演。

今年は、トーマス・マン生誕150年記念の年です。4月には、九州大学で記念講演会が作家の平野啓一郎氏と鈴木結生氏を迎えて行われ、6月には、マン生誕の地リューベックでドイツの大統領を迎えて開催されました。では、なぜ九州大学で行われたのでしょうか。この問いにお答えする形で、昭和100年における日本の特異な翻訳文化を浮き彫りにします。当方は『トーニオ・クレーガー』の新訳（岩波文庫）を6月に上梓したばかりです。

第4回 7月29日（火）

『経済統合がもたらす豊かさと現実』

岩田 健治（九州大学理事・副学長）

1960年生まれ。東北大学文学部卒業。同経済学研究科修士･博士課程、ロンドン大学LSE留学を経て、博士(経済学)。九州大学EUセンター長、同経済学研究院長などを歴任し、2022年より現職。専門はEU統合と国際金融で、元日本EU学会理事長。主な著書に『現代ヨーロッパ経済第6版』(共著、有斐閣、2022年)他。

戦後60余年にわたり、経済統合を推し進めてきたEC(欧州共同体)-EU(欧州連合)とその加盟国は、「市場統合」や「通貨統合」を通じて「統合がもたらす利益(＝豊かさ)」を享受できているのでしょうか。基本的経済データで確認するとともに、現在の欧州経済が、コロナ禍やウクライナ戦争を経て直面している現実と課題について考えます。